

令和 3 年 6 月 23 日現在

機関番号：12604

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23283

研究課題名（和文）音楽授業デザインへ適用可能な身体技法習得過程モデルの構築

研究課題名（英文）Development of A Learning Model Based on the Body-techniques

研究代表者

田邊 裕子（TANABE, Hiroko）

東京学芸大学・次世代教育研究推進機構・助教

研究者番号：60847911

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、教師が授業デザインする際の適用可能性を念頭に置きつつ、ジャンル横断的に適用できる身体技法習得としての音楽学習過程をモデル化することを目的とし、文献調査および民俗芸能保存団体におけるフィールド調査を実施した。その結果、授業デザインに際して教師は、練習と本番を有機的に関連づけて構成すること、そして習得段階を基礎とその後段階に分け、それぞれに適した指導法や学習内容を配列することが必要となることを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、音楽実践に参加すること、すなわち、実践への参加者が共同体や集団の中で独特の身体技法を習得していく文化化のプロセスを音楽の学びの重要な特性としてと捉え、この視点に基づいた音楽学習過程モデルの構築を目指した。本研究で提示する学習モデルはジャンル横断的に適用可能であるため、様々なジャンルの音楽実践に対して汎用的に用いることができ、教師が現場の実態に合わせて援用することが可能となる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to develop a universal music learning model based on the notion of 'body-techniques' in order to be applied to school music-classes, in which various styles of music could be utilized as learning materials. The research methods in the study were as follows: literature research, and first-hand data, collected from ethnographic fieldwork at a Japanese traditional folk arts group. Pertaining to the results, I presented two principles for music learning designing. Firstly, the study found that performance can always be a guide which propels following rehearsals, so that both should be united in a whole learning process. Secondly, a learning process should be separated into two stages, basic and advanced, to most effectively foster the abilities of students. This implies that teachers will need to consider the appropriate methods, activities, and materials for each learning stage.

研究分野：音楽教育学

キーワード：音楽教育 身体技法 民俗芸能 音楽学習

1. 研究開始当初の背景

不確実な現代社会を生きる児童・生徒に資質・能力を育成しようとする現在の教育において特に重視されているのは、教科の本質を踏まえた授業づくりとその実施である。音楽科では、音楽の学びの本質を授業活動全体にわたって実現させていくことで、この要請に応えようとしている。それでは、音楽の学びの本質とは何か。これまで民族音楽学等において蓄積されてきた先行研究では、音楽実践に参加すること、すなわち、参加者が共同体や集団の中で独特の身体技法（モース, 1975）を習得していく文化化のプロセスと捉えている。身体技法とは、後天的に練習や訓練を通して文化的・社会的に獲得される身体の用い方であると定義される。ここから、実践の様式やジャンルを問わず、音楽の学びは本来的に身体技法習得の過程とみなされる（徳丸, 1996）。したがって、音楽の学びの本質に根ざした授業を実施しようとするならば、あらゆる音楽活動を身体技法習得の視点から授業デザインすることができる。

これまで、身体技法の習得を中心とした音楽授業は、民族音楽学等における個別の音楽実践の学術的分析成果を基に開発されたプログラムが担ってきた（伊野, 2008; 中西, 2008 等）。こうしたプログラムは、社会における音楽の学びと学校授業を繋ぐという一定の意義を認められてきた。その一方で、これらが厳密な音楽学的成果に基づき構成されたものであるがゆえに、パッケージ化された構成に則って実施することが想定され、教師が現場の実態に合わせて内容を改変したり、新たに授業デザインする際のツールとして用いられることはほとんど考えられてこなかったと言える。しかし、特に学校の音楽授業では、教師が現場の実態に合わせて教材や活動内容を選択・構成する。そのため、既存の学習プログラムの実施が難しかったり、実施しようとした音楽実践のプログラムが開発されていない場合には、教師自身が授業をデザインしなければならない。

このことから、音楽の学びの本質に根ざした音楽授業デザインのためには、様々なジャンルの音楽実践に対して汎用的に用いることのできる、身体技法習得としての音楽学習モデルが必要となることが指摘できる。そのモデルの構築のためには、身体技法習得のプロセスがどのような構造をもち、どのような構成要件から成り立つのか、そして、それらを学習活動としてどのように組織するのか、が明らかにされなければならない。

2. 研究の目的

以上のような研究背景から、本研究では、教師が授業デザインする際の適用可能性を念頭に置きつつ、身体技法習得としての音楽学習過程をモデル化することを目的とする。

本研究は、従来のジャンルに固有の技法習得を目指した学習プログラムではなく、ジャンル横断的に適用可能な「身体技法習得としての音楽学習モデル」を提案することが目的である。そのために、これまで厳密な音楽学的手法による音楽や踊りの分析に置かれていた力点を、人々が学習過程をどのように組織し展開しているかという新たな視点からの分析へ移すものである。まず、身体技法習得に関する諸理論および事例を検討し、モデルのプロトタイプを抽出する。その上で、具体的な実践における身体技法習得過程の分析を通して、モデルの有効性を検討する。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、以下の3つのアプローチを用いる。

(ア) 文献調査：身体技法の学習に関する先行研究諸理論および実践例から分析枠組みを抽出「わざ」研究（生田, 1987）や状況論（レイヴ&ウエンガー, 1993）と接合され学習論として展開してきた身体技法研究の諸理論を、人々の相互作用という新たな視点に基づいて検討し直す。これによって、人々の多様な関係や関わり合いが身体技法習得のプロセスを生み出すという基本的構造を把握し、理論的基盤とする。その後、技法習得の過程が確認できる国内外から収集した実践報告例から、活動目的、学習段階、使用される教材、評価など、学習過程を構成する基本要素を抽出・整理し、それぞれがどのように組織化されているかを分析する。これによってモデルの枠組みを明らかにする。

(イ) フィールド調査：実際の実践における身体技法習得過程の分析
筆者がこれまでに明らかにしてきた伝承システム分析の成果に基づき、上記（ア）で得られた枠組みを用い、演者の相互行為や発話を映像・音声として記録し、更に詳細に記述・分析する。本研究では特に、人と人とのどのような関わりにより、学習過程を構成する諸要素が具体的な活動へ組織されているか明らかにする。

(ウ) 学習モデルの構築：音楽学習一般に適用可能な音楽学習モデルの提示
上記（ア）および（イ）から得られた成果を基に、身体技法習得としての音楽学習が、どのような構造・構成要件や、どのような活動の組織化の原則によって成り立つかを解明し、教師の授業デザインに利用可能な、汎用的でジャンル横断的な学習モデルを構築する。

4. 研究成果

(1) 音楽学習の類型と分析方法

一般的な学習の枠組みと同じく、音楽学習も大まかにフォーマル学習、ノンフォーマル学習、インフォーマル学習に分けられる。フォーマル学習とは学校や音楽大学（音楽院）等の公的機関でおこなわれるものを指す。一方でノンフォーマル学習とは「学習（学習目標、学習時間、もしくは学習支援の観点から）」としては明確にデザインされていないが、計画された活動に埋め込まれた学習（OECD, 2011）」を指し、町の音楽教室やクラブ活動等もここに含まれると考えられる。またインフォーマル学習とは「仕事、家庭生活、余暇に関連した日常の活動の結果としての学習（OECD, 2011）」と定義され、その特徴として「意図的でない学習」「学習や学問分野によって構造化されていない」「市場参入制限のない組織」等が挙げられており、地域共同体等で傳承されている民俗芸能はここへ分類されると考えられる。

それぞれの学習において音楽学習活動がどのように組織されているかと言えば、フォーマル学習では権威づけられた教科書や体系化された学習段階が整備され、それに従って学習活動が進められる。またノンフォーマル学習においても、そこでは種々の明文化された教科書やガイドが存在し、多くの場合そうしたテキストが学習活動の体系化を担っており、それらを参照すれば学習体系の抽出や理解が可能になる。一方でインフォーマル学習においては明文化された学習テキストやガイドが存在しない場合も多く、どのように学習が体系化されているかは暗黙知化され、あるいはそうした学習の場では活動は体系化されていないとされていることもある。しかし、いかに場当たり的に見える学習活動であっても、当事者ですら意識化していない、学習を成り立たせ促進させている暗黙裡の学習方略が存在している可能性の高いことが分かった。それを明らかにするためには、実践活動の参与観察やエスノグラフィあるいは録音録画等の記録を分析していくことが必要になることを指摘した。

(2) 身体技法習得としての音楽学習の原理的枠組み

音楽学習を身体技法の習得過程として見る際には、音楽と身体の関係の中にさらに学習という項を挿入して検討する必要がある。教育学周辺領域ではこれまで学習と身体の間について強い関心が寄せられ、研究の豊かな蓄積が存在する。こうした学びと身体をめぐる先行研究における論点や成果を整理し概観することで、身体技法の習得としての学びについての原理的な構成要件を得た。

まず一点目として、知識観の転回である。このことは、知識は具体の状況の中に埋め込まれているため、状況そのものに身を投じてその状況ごと知識を理解しなければならないことを示している。二点目として、学びの経験を身体性の次元から捉えることの重要性である。知識が状況に埋め込まれているならば、その状況に身を投じて得る経験は学習の重要な構成要素となる。個々人の個別かつ具体的な身体を通して世界が独特に「生きられている」という現象学的知見に立てば、原理的には学びの意味とは一回性をもち、また均質化され得ない。つまり、教え手と学び手がその場においてどのような経験によってどのような意味を生み出しているかを常に捉えながら、常に新しく道筋を切り開いていく営為こそが「学習」と位置づけられる。そして三点目として、学びの共同性を挙げた。教え手も学び手も、それぞれの身体性を基盤とした経験によって学びの状況へ参与している。教え手と学び手双方の働きかけがあってはじめて学びという状況が成立することから、身体性の学びとはこうした共同性に根差した「共同作業」なのである。

こうして得られた三点は、身体技法習得としての音楽学習モデルの原理的な枠組みとして位置づけられることを指摘した。

(3) 身体技法習得からみた学習のモデル

多くの音楽実践においては技能等を身につける練習と、完成したパフォーマンスを披露する本番から成り立っている。しかし身体技法習得の過程として音楽実践あるいは音楽学習を見ると、両者は二項対立的な存在ではなく、互いに影響を与え合う構造を有していることが分かった。つまり、それぞれは独立した要素ではなく、特に本番でのパフォーマンス経験は学習者が自分の習得状況を把握する指標や、その後の練習において何を学ぶべきかの指針となる機会であることから、両者はどちらも身体技法習得のプロセスを構成する要素であると言える。

このことから、こうした構成要素が生み出す構造を踏まえた授業デザインが必要となることが示唆された。学校授業にあっても、本番を練習の成果の披露という最終的な到達段階として位置づけるのではなく、そこでの経験を子どもたちが次の学習段階へ活かすことを必然とするような学習活動のデザインが重要になることが明らかになった。

(4) 身体技法習得の段階

民俗芸能保存会のフィールド調査結果からは、身体技法習得の進展が大きく二つの段階から構成されていることが明らかになった。すなわち、内容や習得展開が固定化された基礎段階と、その後に流動的かつ柔軟に進んでいく段階である。先行研究（生田, 1987）においては伝統芸能の稽古では学習の非段階性が特徴として挙げられているが、しかし習得の入口では初学者が実

践に参入しやすいよう、緩やかに段階が設けられていることが明らかになった。そうした基礎段階を過ぎると、学習者個人の特性やその時の状況等によって習得はかなりの程度流動的に進んでいき、学習者全員が同じ展開を辿るとは限らないことが分かった。

このことから、教師が授業デザインを行う際にも、基礎的な段階とその後の段階をある程度明確化することが必要になると言える。基礎段階において学習者は実践を遂行するために必要となる一定の技能をまず身につけることが求められるため、適度な一斉指導も有効となる。しかし、その後の段階では学習者それぞれの習熟度に差が生じてくる可能性が高く、より個人それぞれに適した学習内容を考える必要があることが示唆された。

〈引用文献〉

- ① OECD(2011)『学習成果の認証と評価：働くための知識・スキル・能力の可視化』明石書店.
- ② 生田久美子(1987)『「わざ」から知る』東京大学出版会.
- ③ 伊野義博(2008)「小学校における日本の伝統的な歌唱の授業プラン—長唄手ほどき曲「蟲の聲」を教材として」『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』1(1), pp. 83-97.
- ④ 徳丸吉彦(1996)『民族音楽学理論』放送大学教育振興会.
- ⑤ 中西沙織(2008)「能における「わざ」の習得に関する研究—事例分析からの学習プログラムの開発を通して」博士論文.
- ⑥ モース, マルセル(1976)「身体技法」『社会学と人類学Ⅱ』有地亨・山口俊夫訳, 弘文堂, pp. 121-156.
- ⑦ レイヴ, ジーン. ウェンガー, E. (1993)『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』佐伯胖訳, 産業図書.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田邊裕子
2. 発表標題 目黒流貫井雛子における身体技法の習得過程 習得の段階性と練習のずれをめぐって
3. 学会等名 日本音楽教育学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------